

# 仏典はどのように漢訳されたのか

——笈多訳『金剛能断般若波羅蜜經』を巡って——

渡 辺 章 悟

## はじめに

『金剛般若經』は東アジアに流布した最も重要な大乘經典の一つである。その『金剛般若經』の漢訳には七訳があるが、本稿で扱う笈多訳については未だ検討の俎上にのぼったことはない。それは笈多の翻訳活動が不明であること、笈多訳『金剛能断般若經』の翻訳方法が特殊であること、その内容が不分明であることなどがその理由であろう。しかし、笈多訳は一定の訳出法に基づいて翻訳されており、その翻訳の特殊性が逆に『金剛般若經』の原典研究のための重要な資料となるのである。

筆者は現在スコイエン・コレクションに含まれるパーミヤーン出土のサンスクリット写本 *Vajracchedikā Prajñāpāramitā* を出版準備中であるが、その原典研究にもこの笈多訳との比較研究は極めて重要になる。そこで最初にそのための基礎資料として、笈多の譯經活動、および笈多訳の概要をスケッチしておきたい。

次いで、笈多訳『金剛般若經』の検討に移り、その還梵を試みる。それによって、『金剛般若經』の新たな資料が浮かび上がるはずである。

現在『金剛般若經』については、実に多くの研究が蓄積されてきているにもかかわらず、笈多訳については宇井伯壽が50年ほど前に取りあげて以来、研究の進展はない<sup>(1)</sup>。本稿はこの笈多訳『金剛能断般若經』に光を当てるものであるが、それは本經の特殊性ゆえに、『金剛般若經』研究のさらなるステップにつながるであろう。

## 1. 笈多の生涯と訳經活動

隋時代に活躍した訳經僧でグプタ (Gupta) といわれるのは、闍那崛

多 (Jinagupta 527-604<sup>(2)</sup>) と達摩笈多 (Dharmagupta ?~619) の二人がいる。ただし、笈多と略されるのは、達摩<sup>(3)</sup>[磨]笈多 (Dharmagupta) のことで、法密、法蜜、法蔵などとも訳される。笈多の伝記については『続高僧伝』第二巻「達摩笈多の条」、『大唐内典録』第五巻、第六、第七<sup>(5)</sup>、『開元釈教録』第七巻、第十九、第二十<sup>(4)</sup>、『貞観新定釈教目録』第十、「縁生経并論序」<sup>(6)</sup>等に掲載されている。

それによれば、彼は南インド (賢豆)<sup>(7)</sup> のラーラ (羅囉 Lāla) 国の人といわれる。クシャトリヤ族出身で、ヴィヤーグラ (vyāghra 弊邪伽囉、虎氏の意) という姓であった。五人兄弟の長男であり、両親は彼の出家を許さなかったが、深く仏法を信仰し、離俗することを願い、23才で北インドのカニャクブジャ (Kanyakubja 曲女城)<sup>(9)</sup> のクムダ (Kumuda 兜牟地、白い睡蓮、黄蓮華) 僧院で出家、ダルマグプタ (法密) と改名した。25才で具足戒を受け、ブツダグプヤ (Buddhagupta 仏駄笈多) を和尚 (upādhyāya 郁波弟耶夜、親教師) とし、グナダッタ (Guṇadatta 徳施) と普照を戒師 (ācārya 阿遮利夜、教師) として受戒した。受具してから三年間をそこで過ごし、その後、普照がタッカ国王に招請されたのに応じて、師とともにタッカデーシャ (Ṭakkadeśa)<sup>(10)</sup> に赴いた。タッカデーシャは現在の西パンジャーブにあり、シアールコトを中心とした地域である。彼はそこで「大支那國」の存在を知り、他の五人の同朋とカーピシー (迦畢試国) に行き、パーミヤーン、トハリスターン、ワッハーン、タクラマカン北道、トゥルフアン (高昌国)<sup>(12)</sup> を経て、隋の開皇10年 (590) 10月に京城大興城 (Tch 'ang ngan)<sup>(11)</sup> に入り、大興善寺に住した。

開皇年間から仁寿4年 (604) までは、闍那崛多の訳業に従事していたが、闍那崛多<sup>(13)</sup> が擯けられて、東越<sup>(14)</sup> に去ってからは独立して翻訳し、大業初年 (605) から大業末年 (616) まで翻訳に従事した。この間の筆受は沙門彦琮、行矩、明則らが担当した。笈多は『起世因本経』『縁生初勝分法本経』『薬師如来本願経』『撰大乘論』『金剛般若論』などの経論を翻訳し、619年 (武徳2) 洛陽にて没した。なお、彦琮 (556-610) は彼の伝記『達摩笈多伝』四巻を書いたと伝えられるが、本書は現存していない。

達摩笈多の訳業は590年から619年までの28年間で、共訳としては6典籍、単独の訳者としては9典籍程度と見られ、必ずしも多いわけではな

い。その訳業の状況は余り明確ではなく、訳出経典も『続高僧伝』では七部四十六卷、『内典録』『開元録』では九部四十六卷、『訳経図紀』では十八部八十一卷とするなど経録によって異なる。

隋代597年に費長房によって『歴代三宝紀』が編纂された頃には、すでに笈多は大興善寺で訳経に従事していたはずであるが、笈多独自の翻訳書がなかったためか、『歴代三宝紀』には名が記載されていない。さらに言えば、同じく隋代の法経等撰(594年)『衆経目録』(大正No. 2146)と彦琮撰(602年)『衆経目録』(大正No. 2147)にもその名は見られない。笈多の訳業は唐代664年、道宣撰『大唐内典録』になって初めて登場するのである。また、同じく道宣によって貞観19(645)年に撰述された『続高僧伝』、あるいは、665年に編纂された<sup>17)</sup>静素撰『衆経目録』(大正No. 2148)にも見られる。

## 2. 笈多訳『金剛能断般若経』

達摩笈多(Dharmagupta)譯『金剛能断般若経』は、大正藏経第8卷(No.238)に納められている。本卷にはこの訳以外にも複数の金剛般若経の翻訳が見られる。それらを訳出年代別に並べると、以下のようになる。

- (1) 鳩摩羅什訳『金剛般若波羅蜜経』No. 235
- (2) 菩提流支訳『金剛般若波羅蜜経』No. 236
- (3) 留支訳『金剛般若波羅蜜経』No. 236
- (4) 真谛訳『金剛般若波羅蜜経』No. 237
- (5) 笈多訳『金剛能断般若波羅蜜経』No. 238
- (6) 玄奘訳『大般若般若波羅蜜多経』『第九能断金剛分』No. 220
- (7) 義浄訳『仏説能断金剛般若波羅蜜多経』No. 239

このうち第三と第四は大正新修大藏経の編纂者が加えた句読点の違いを除いて、ほぼ全同であり、第四の独自性は否定されているので、ここでは通例にならって六訳とする。これら六訳の第五が笈多訳とされる『金剛能断般若経』である。しかし、実は「大正新修大藏経」の底本となった「高麗大藏経」には計五訳しか存在せず、この笈多訳の『金剛般若経』は入蔵されていないのである。この事実をどのように考えたらよ

いであろうか。まずその状況を再び経録によって調べてみよう。

笈多訳『金剛能断（断割）般若経』は、隋大業年中に翻訳されたと思われるが、その記録は古い経録では『開元録』（730年）あるいは『貞観録』（800年）になって初めて付加的に記録されるものである。また、『二十五種藏経目録対照考釈』<sup>20</sup>によって後代の経録を見ると、まず「高麗再雕大藏経目録」<sup>21</sup>は記載がない。また、「至元法宝勘同総録」（No.25）、「大藏経綱目指要録」（No.37）、「大藏聖教法宝標目」（No.38）にも欠如しているが、それ以外の21種類の目録には掲載されている。このように笈多訳『金剛能断般若波羅蜜経』は、ほとんどの大藏経目録においてその出自が明らかな經典と言えるのである。

しかし、古録での経題は「能断」ではなく「断割」と相違する。もし、『開元録』の付加的な記述にある『金剛断割般若波羅蜜経』と「大正藏経」に採録される『金剛能断般若波羅蜜経』が同じ經典であるとするなら、なぜこのような経題の変更が行われたのだろうか。また、なぜ本経は『歴代三宝紀』『大唐内典録』『靖邁録』『静泰録』といった古い経録には正式にその名を留めなかったのだろうか。

その理由として第一に考えられるのは、翻訳の質に問題があったためであろう。本経の翻訳について言及する最初期の資料である『開元釈教録』には、「初めに笈多、金剛断割般若波羅蜜経一卷、及び普樂経十五卷を翻じたが、未だ練覆するに及ばず。偽鄭の淪廢に値い、重ねて修するに暇あらず。今、卷部は京にありて、多くは八相等の事を明かす」とある。この「金剛断割般若」は未校訂であったために未完の翻訳とされていたのである。これが正式な経録に記載されなかった理由であろう。

次に、この記述にある「金剛断割般若」が、現在みられる笈多訳『金剛能断般若波羅蜜経』と同じであるのかどうか。もし同じであるとするなら、なぜ「断割」が「能断」に変わっているのか、その変更は、何時、誰によってなされたのであろうか。

両書が別の訳者による經典であるとするなら問題はないが、少なくとも経録にも笈多訳があったことが明記され、両者ともに笈多訳として伝承され、しかも一つは現存しているのである。その内容は後述するように直接訳語を置き換えただけのものである。このような特異な形態の經典を、わざわざ偽作する必要もない。そうであるとするなら、一応、二

つの翻訳をともに笈多訳として考えるべきであろう。

その場合、問題は経典のタイトルの相違である。現在のところ資料の上での確証は得られていないが、筆者はそれもこの翻訳の未完という性格のため、経題と雖も変更することが容易であったと考えている。

いずれにしてもこの訳は、翻訳が完成される以前の途中経過、訳経の制規でいうところの「筆受」までで、「綴文」の段階まで済んでいない preliminary translation であろう。しかし、その故にこそ漢訳の実態を明らかにする貴重な情報が豊富に含まれている。

以下には、現存のサンスクリット原典及び他の漢訳諸本を参照して、笈多訳の最初の数章について還梵を試みる。その変換作業の中から笈多訳に一定の翻訳の規制があることを明らかにし、それを各品詞別、用法別にカテゴライズし、本経独特の訳法を抽出する。このことによって、漢訳が成立するまでの道筋を追うことができるはずである。

また、本翻訳はサンスクリット原文とかなりの精度で一致するが、若干異なる伝統があり、それが重要な局面でコンゼ校訂のサンスクリット原典ではなく、ガンダーラの写本や他の漢訳に一致することがしばしば指摘できる。このように、笈多訳を還梵することによって、失われたサンスクリット原典の姿を再現することができるという意味でも、本経の研究は重要な意味を持つはずである。

なお、本稿では大正蔵の達摩笈多訳『金剛能断般若経』を底本とする。その際に付せられた句読点には多くの誤りがあるが、実際の対象の便を考え、そのまま記すことにした。脚註はコンゼ本との異同を中心に、必要最低限のコメントにとどめた。

### 【略号】

Cz: E. Conze, *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, 2<sup>nd</sup> ed. Serie Orientale Roma XIII, IsMEO: Roma, 1957 (2<sup>nd</sup> ed. 1974).

G: G. Schopen, "The Manuscript of the Vajracchedikā Found at Gilgit," in *Studies in the Literature of the Great Vehicle: Three Mahāyāna Buddhist Texts*, ed. by L. O. Gómez and J. Silk, the University of Michigan, 1989, pp.89-139.

P: E. F. Pargiter ed., "Vajracchedikā in the Original Sanskrit," in

the *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkistan*, ed. by A. F. R. Hoernle: Oxford, 1916, pp.176-195.

Sc: Sh. Watanabe and Paul Harrison, "Vajracchedikā Manuscripts in the Schøyen Collection," *Manuscripts in the Schøyen Collection* III; *Buddhist Manuscripts* Volume II, Oslo, 2005 (forthcoming).

### 3. 笈多訳の文法的特色

以下に示すものは笈多訳の特有な用法を名詞、動詞、絶対分詞、分詞、代名詞、名詞・代名詞・分詞の格、疑問代名詞・副詞、不定代名詞、不変化辞、関係詞の順でまとめたものである。その実際は次章の還梵を見ていただきたい。

#### 1. 名詞の特殊な訳語例

##### [ 1 ] 音訳

憂波泥奢：upanīṣad

迦羅：kalā

俱致那由多：koṭi-nayuta

伽陀：gāthā

支帝有：caitya-bhūta

僧企耶：saṃkhyā

##### [ 2 ] 語の分解→サンスクリットの語順そのままに対応訳語を配当

無親搏(搏)施與：anāthapiṇḍada

順攝：anugraha, anupariṅhita

非彼岸到：apāramitā

命者：āyuṣmat

心流注：cittadhāra

搏(搏)墮<sup>②</sup>：piṇḍapāta

最勝彼岸到：paramapāramitā

智慧彼岸到：prajñāpāramitā

小兒凡夫生：bāla-prthagjana

聞者：śrāvastī

流入：srotaāpatti

[ 3 ] その他特有の訳語

証覚：abhisamḥbuddha

善家子：kulaputra

善家女：kuladuhitr

勝林：jetavana

燈作：dīpaṃkara

法本：dharmaparyāya

善實：subhūti

善高：sumeru

2. 動詞

(1) 1 人称 …我：-āmi, -e

信我 avakalpayāmi, 欲我 ārocayāmi, 持我 dhārayāmi,  
知我 pratedayāmi, 成就我 niṣpādayiṣyāmi, 解我  
adhimucye

(2) 三人称 説名…者 ucyate…iti

(3) 未来

[ 1 ] …當：-iṣye, -iṣyanti

説當 bhāṣiṣye, 有當 bhaviṣyanti, 受當 udgrahiṣyanti,  
持當 dhārayiṣyanti, 讀當 vācayiṣyanti, 誦當  
paryavāpsyanti, 廣説當 samprakāśayiṣyanti, 盡當  
kṣapayiṣyanti, 得當 anuprāpsyanti

[ 2 ] …當有：-iṣyanti

當有 bhaviṣyanti, 發生當有 utpādayiṣyanti

[ 3 ] その他

有：bhaveyuḥ

## 3. 絶対分詞

…已：-tva, -tvā, -ya, -tya

[ 1 ] -tva, -tvā：已

行已 caritvā; 作已 kṛtvā, kṛtva

[ 2 ] -ya：已

著已 nivāsyā, 著已 pratiṣṭhāpyā, 詣到已 upasaṃkraman  
upasaṃkramya, 受已 udgrhya

[ 3 ] -tya：已

作已 kṛtya, 右繞作已 pradakṣiṇīkṛtya

## 4. 分詞

・過去分詞 …已：-ta,

作已 kṛta, 攝已 saṃgrhīta

・未來受動分詞 …應：-tavya

住應 sthātavya, 修行應 pratipattavya, 降伏應 pragrahītavya,  
滅度應 parinirvāpayitavya, 說應 vaktavya, 見應 draṣṭavya,  
與應 dātavya, 捨應 prahātavya, 發生應 utpādayitavyam

・絕對於格 …已

如是語已 evam ukte

## 5. 代名詞

如是 etad, 此 idam, enam; 彼 tad

## 6. 名詞, 代名詞, 分詞の格

…邊：-am (Ac)

世尊邊 bhagavān, 善實邊 subhūtim

…故：-ena (Ins), -āt (Ab)

彼故 tena, tasmāt

…為：-āya (D, sg.)

搏為 piṇḍāya

…等：-bhyaḥ (D, pl.)

如來等應等正遍知等

tathāgatebhyo ṛhadbhyaḥ samyaksambuddhebhyaḥ  
歸命一切佛菩薩海等 namo sarvabuddhabodhisattvasamuda-  
yebhyaḥ, 為他等 parebhyaḥ

…所: -sya (G), -syām (L)

彼所 tasya, tasyām

…中: -e, -eṣu, -asmin, -āsu (Loc)

經中 sūtre, 說中 bhāṣyamāne, 法中 dharmeṣu, 此中 yasmin,  
tasmin, 彼中 tāsu, 正法破壞時中轉時中 saddharma-vipralope  
vartamāne

### 7. 疑問代名詞, 副詞

何 kim, kaḥ, katham; 何所 kasya, 云何 katham

### 8. 不定代名詞

頗有 kecit, 有 kaścit (有如是 kaścid eva), 一法 kaścid dharma-

### 9. 不變化辭

…者 iti, 名 iti, 若 vā, 若 sacet, 如是 eva, evam, 雖, 亦 api,  
然 tu, 雖然 api tu, api nu, asti; 如 hi (如此 hīdam), 此 itas

### 10. 關係詞

乃至所有 yāvat, 所有 yāvat, tāvat; 彼所有 tāvat, 如 yathā,  
若 yaḥ, 若 … 彼 yena … tena

## 笈多訳『金剛能断般若波羅蜜經』還梵

766c17 歸命 一切 佛 菩薩 海 等<sup>(24)</sup>  
 namo sarva-buddha-bodhisattva-samudayebhyaḥ

### § 1 766c18-26

如是 我 聞 一 時 世尊。  
 evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye. bhagavān

聞者<sup>(25)</sup> 遊行 勝林中<sup>(26)</sup> 無親 搏施與<sup>(27)</sup> 園中。  
 śrāvastyāṃ viharati sma jetavane anāthapiṇḍadasya ārāme

大 比丘 衆 共 半 三 十 比丘 百。<sup>(28)</sup>  
 mahatā bhikṣu-saṃghena sārddham ardha-trayodaśabhir bhikṣuśataiḥ

爾時 世尊 前 分 時。 上裙著已。 器  
 atha khalu bhagavān pūrva-āhṇa-kāla-samaye nivāsyā pātra-

上給衣 持。 聞者 大 城 搏爲<sup>(29)</sup> 入。  
 cīvaram ādāya śrāvastīm mahā-nagarīm piṇḍāya prāvīkṣat.

爾時 世尊 聞者 大 城。 搏爲<sup>(30)</sup> 行已。<sup>(31)</sup> 作已  
 atha khalu bhagavañ śrāvastīm mahā-nagarīm piṇḍāya caritvā kṛta-

食 作已<sup>(32)</sup>， 後 食 搏 墮 過， 器 上給衣  
 bhakta-kṛtyaḥ paścād-bhakta-piṇḍa-pāta-pratikrāntaḥ pātra-cīvaram

收攝。 兩足 洗。 坐具<sup>(33)</sup> 世尊 施設 如是 座中。  
 pratiśāmya pādaḥ prakṣalya nyaśīdat bhagavān prajñapta-eva-āsane

( 34 )

跏趺 結 直 身。 作 現前 念  
paryañkam ābhujya-rjūṃ kāyaṃ prañidhāya pratimukhīm smṛtim

近住。

upasthāpya.

爾時 多 比丘。 若 世尊 彼 詣  
atha khalu sambahulā bhikṣavo yena bhagavāṃs tena upasaṃkraman

到已。 世尊 兩足 頂 禮。 世尊<sup>34</sup>邊  
upasaṃkramya bhagavataḥ pādaū śirobhir abhivandya bhagavantam

三 右繞 作已。 一 邊 坐  
triṣ- pradakṣiṇīkṛtya eka-ante nyaśīdan.

## § 2 766c26-767a9

彼 復 時 命者 善實。 彼所<sup>35</sup> 如是 衆聚  
tena khalu punaḥ samayena-āyusmān subhūtis tasyām eva parṣadi

集會 坐。  
saṃnipatito 'bhūt saṃniṣaṇṇaḥ.

爾時 命者 善實 起 坐。 一肩 上  
atha khalv āyusmān subhūtir utthāya-āsanād, ekāṃsam uttara-

著 作已。 右 膝 輪 地 著已。  
āsaṅgaṃ kṛtvā, dakṣiṇaṃ jānu-maṇḍalaṃ pṛthivyām pratiṣṭhāpya,

若 世尊 彼 合掌。 向<sup>36</sup> 世尊邊 如是言。  
yena bhagavāṃs tena-añjaliṃ praṇamya bhagavantam etad avocat:

希有 世尊。 乃至所有 如來 應  
 āścaryam bhagavan yāvad eva tathāgatena-arhatā

正遍知。 菩薩 摩訶薩  
 samyaksambuddhena bodhisattva mahāsattvā

順攝。 最勝 順攝。 乃至所有 如來  
 anupariṅṛhītāḥ paramaṇa-anugraheṇa. yāvad eva tathāgatena-

應 正遍知。 菩薩 摩訶薩 付囑。  
 arhatā samyaksambuddhena bodhisattvā mahāsattvāḥ parīnditāḥ

最勝 付囑。  
 paramayā parīndanayā.

彼 云何 世尊 菩薩 乘 發行 住應。<sup>(40)</sup>  
 tat katham bhagavan bodhisattva-yāna-samprasthitena sthātavyam<sup>(41)</sup>

云何 修行應。 云何 心 降伏應。  
 katham pratipattavyam katham cittam pragrahītavyam?

如是 語已。 世尊 命者 善實邊 如是 言。  
 evam ukte bhagavān āyusmantam subhūtim etad avocat:

善 善， 善實。 如是 如是。 善實， 如是 如是。<sup>(42)</sup>  
 sādhu sādhu subhūte, evam etat subhūte evam etat.

順攝 如來 菩薩 摩訶薩。 最勝  
 anupariṅṛhītās tathāgatena bodhisattvā mahāsattvāḥ paramaṇa-

順攝。 付囑 如來 菩薩 摩訶薩。  
 anugraheṇa, parīnditās tathāgatena bodhisattvā mahāsattvāḥ

( 36 )

最勝。 付囑 彼 善實 聽。 善 善意  
paramayā parīndanayā. tena hi subhūte śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca

念作。 說當 如 菩薩 乘 發行，  
manasi-kuru, bhāṣiṣye yathā bodhisattva-yāna- samprasthitena

住應。 如 修行應。 如 心 降伏應。  
sthātavyaṃ yathā pratipattavyaṃ yathā cittaṃ pragrahītavyam.

如是，世尊。 命者 善實。 世尊邊 願欲聞。  
evaṃ bhagavann āyuṣmān subhūtir bhagavataḥ pratyaśrauṣīt

### § 3 767a9-18

世尊 於此 言。 此 善實。 菩薩 乘 發行，  
bhagavān etad avocat: iha subhūte bodhisattva-yāna-samprasthitena

如是 心 發生應。  
evaṃ cittaṃ utpādayitavyam:

所有 善實， 衆生。 衆生 攝 攝已。 卵 生  
yāvantaḥ subhūte sattvāḥ sattva-saṃgrahaṇa saṃgrhītā aṇḍa-jā

若，胎 生若，濕 生若，化生 若。 色 若，  
vā jarāyu-jā vā saṃsveda-jā vā upapādukā vā, rūpiṇo vā

無色 若。 想 若，無想 若。 非 想，  
arūpiṇo vā, saṃjñīno vā asaṃjñīno vā na eva saṃjñīno

非 無想。 所有 衆生 界 施設已。 彼 我  
na asaṃjñīno, yāvan kaścit sattva-dhātur prajñāpyate, te mayā

一切 無受餘 涅槃 界 滅度應。 如是  
sarve anupadhiṣeṣe nirvāṇa-dhātau parinirvāpayitavyāḥ. evam

無量 雖 衆生 滅度。 無 有一 衆生 滅度  
aparimāṇān api sattvān parinirvāpya na kaścit sattvaḥ parinirvāpito

有。 彼 何所 因。  
bhavati. tat kasya hetoḥ?

若 善實。 菩薩 摩訶薩<sup>49</sup>。 衆生 想 轉。  
sacet subhūte bodhisattvasya mahāsattvasya sattva-saṃjñā pravarteta,

不 彼 菩薩 摩訶薩<sup>50</sup> 名 說應。 彼 何所 因。  
na sa bodhisattvo mahāsattva iti vaktavyaḥ. tat kasya hetoḥ?

不 彼 善實 菩薩 名 說應<sup>51</sup>。 若 衆生想<sup>52</sup>  
na sa subhūte bodhisattva ity vaktavyo yasya sattva-saṃjñā

轉。 壽 想 若, 人 想 若 轉。  
pravarteta jīva-saṃjñā vā pudgala-saṃjñā vā pravarteta.

#### § 4 767a18-767b1

雖 然 復 次 時 善實。 不 菩薩 摩訶薩<sup>53</sup> 事  
api tu khalu punaḥ subhūte na bodhisattvena mahāsattvena vastu-

住 施 與應。 無 所 住 施  
pratiṣṭhitena dānaṃ dātavyam, na kvacit pratiṣṭhitena dānaṃ

與應。 不 色 住 施 與應。 不 聲 香  
dātavyam, na rūpa-pratiṣṭhitena dānaṃ dātavyam, na śabda-gandha-

( 38 )

味 觸 法 中 住 施 與 應。  
rasa-spraṣṭavya-dharmeṣu pratiṣṭhitena dānaṃ dātavyam.

如 是 此 善 實 菩 薩 摩 訶 薩 施 與 應。  
evam hi subhūte bodhisattvena mahāsattvena dānaṃ dātavyaṃ

如 不 相 想 亦 住。 彼 何 所 因。  
yathā na nimitta- samjñāyām api pratiṣṭhet. tat kasya hetoh?

若 善 實。 菩 薩 摩 訶 薩<sup>(54)</sup>。 不 住 施 與  
yaḥ subhūte bodhisattvo mahāsattvaḥ apratiṣṭhito dānaṃ dadāti,

彼 所 善 實 福 聚 不 可 量 受 取。  
tasya subhūte puṇya-skandhasya na sukaraṃ pramāṇam udgrahītum.

彼 何 意 念。 善 實。 可 前 方 虛 空  
tat kiṃ manyase subhūte sukaraṃ pūrvasyāṃ diśy ākāśasya

量 受 取。 善 實 言。 不 如 此 世 尊。  
pramāṇam udgrahītum? subhūtir āha: no hi-idaṃ bhagavan.

世 尊 言。 如 是 右 後 高 下 上<sup>(55)</sup>  
bhagavān āha: evam dakṣiṇa-pāścima-uttarāsv adha<sup>(56)</sup> -ūrdhvaṃ

方。 順 不 正 方。 普 十 方 可 虛 空 量  
dig-vidikṣu<sup>(57)</sup> samantād daśasu dikṣu sukaram ākāśasya pramāṇam

受 取。 善 實 言。 不 如 此 世 尊。  
udgrahītum? subhūtir āha: no hi-idaṃ bhagavan

世 尊 言。 如 是 如 是。 善 實。 如 是 如 是。 若 菩 薩<sup>(58)</sup>  
bhagavān āha: evam eva subhūte evam eva yo bodhisattvo

摩訶薩。不住施與。彼所善實  
mahāsattvo <sup>(59)</sup> pratiṣṭhito dānaṃ dadāti, tasya subhūte

福聚不可量受取。  
puṇya-skandhasya na sukaraṃ pramāṇam udgrahītum.

雖然復次時。善實。如是菩薩乘發行  
api tu punaḥ <sup>(60)</sup> subhūte evaṃ bodhisattva-yāna-samprasthitena

施與應。如不相想亦住。  
dānaṃ dātavyaṃ yathā na nimitta-saṃjñāyām api pratitiṣṭhet.

### § 5 767b1-767b6

彼何意念。善實。相具足如來見應  
tat kiṃ manyase subhūte lakṣaṇa-sampadā tathāgato draṣṭavyaḥ?

善實言。  
subhūtir āha:

不世尊相具足如來見應。彼何所因  
<sup>(61)</sup> na bhagavan lakṣaṇa-sampadā tathāgato draṣṭavyaḥ. tat kasya hetoḥ?

若彼如來相具足說。彼如是非相具足。  
<sup>(62)</sup> yā sā tathāgatena lakṣaṇa-sampat bhāṣitā saiva alakṣaṇa-sampat.

如是語已。世尊。命者善實邊。如是言。所有  
evam ukte bhagavān āyusmantam subhūtim etad avocat, yāvat

善實相具足。所有妄。所有不相具足。  
subhūte lakṣaṇa-sampat tāvan mṛṣā, yāvad alakṣaṇa-sampatī

所有 不 妄 名。此 相 不 相 如 來 見 應  
 tāvan na mṛṣā-iti hi lakṣaṇa-alakṣaṇatas tathāgato draṣṭavyaḥ.

## 注

- (1) 宇井伯壽「金剛般若經和訳」及び「金剛般若經積論研究」(『大乘仏典の研究』岩波書店、1963)。
- (2) ジナグブタ(闍那幅多)は徳志とも訳される。ガンダーラ(犍陀囉国)のプルシャプラ(富留沙富羅)出身の伝法僧。大林寺でマガダ出身の闍那耶舎(Jinayaśas)と北西インド波頭摩(Padma)出身の攘那跋陀羅(Jñānabhadrā)について出家、533年に受戒した。555年に師たち10人とプルシャプラを出発し、カーピシー、パーミヤーン、エフタル、ホータン、ワッハーンからタクラマカン南道を通って、557年に青海・楽都に至り、558年頃長安(北周)に入った。『仏本行集経』『護国菩薩経』など37部176巻を訳し、開皇20年(600)、78才で没したとされる。笈多は大興善寺において晩年の闍那幅多の翻訳事業に参加したことが知られている。ジナグブタの伝記については『続高僧伝』(大正 No. 2060, vol. 50, 433b-434c)を参照。
- (3) 靖邁撰『古今訳経圖紀』によれば、「沙門達摩笈多。隋言法密。南賢豆國人」(大正 No. 2151, vol. 55, 366b7)とする。『開元釈教録』(大正 No. 2154, vol. 55, 551c8)及び『貞観新定釈教目録』(大正 No. 2157, vol. 55, 850a13)では「沙門達摩笈多。隋云法密、亦云法藏。」とする。
- (4) 大正 No. 2060, vol. 50, 434c-436b。
- (5) 大正 No. 2157, vol. 55, 849c-851a。
- (6) 大正 No. 716, Vol. 16, p.837。
- (7) 道宣によれば、「賢豆のもとの音は“因陀羅婆陀那”で、これは“主処”と云う。謂く、天帝の護るところの故にである。賢豆の音は彼の国の訛りであり、身毒、天竺は此方の訛りである」と述べている(『続高僧伝』No. 2060, 433b)。しかし、『開元釈教録』(No. 2154, 549a)では「因陀羅婆陀那」云々とする。このことから考えると『続高僧伝』の「婆」はおそらく「娑」の誤りで、「因陀羅婆陀那」とは indrasadana (インドラ神の住居)の音訳と見なすべきであろう。賢豆(hindu)も、因陀羅婆陀那(indrasadana)も古代インドの呼称である。なお、『金剛般若論』(大正 No. 1510, 757a), 『縁生論』(No. 1652, 482b), 『菩提資糧論』(No. 1660, 517b)でも「隋南印度三蔵達磨笈多訳」とある。また、『開元釈教録』

(551c) で「内典録、及び翻経図は並んで北天竺鳥場国 (udyāna) の人と云うは非也」と取えて注記しているように、従来から笈多の出身は北インドと南インドの二説あったが、大体は南インドとしているようである。なお、闍那崛多の出身地はガンダーラのプルシャプラであるが、それを北賢豆とっている (Cf. 注1)。したがって、こちらは北インドということになる。

- (8) ラーラ (Lāla 羅囉) 国は西インドのグジャラート州近辺である。『大唐西域記』(大正51, 935c, 936b) によれば、羅囉は羅[羅]と記され、伐臘毗国 (Balabhi) が北羅囉で、摩臘毗婆国 (Mālava) が南羅囉国であり、いづれも南インドとの境である。伐臘毗国 (Balabhi あるいは Valabhadra) は Peninsula の東にあった古い都のことで、現在のヴァツラを中心とした地域だから、マールワール国から見れば西になる。この東西両国を合わせたのがララあるいはラタという地域である。ここはキャンベイ湾岸を中心とした地域であり、そこでダルマグプタは生まれたのである。なお、羅囉 (Lāla) ではなく、羅囉 (Lāra) とすることもある。羅囉 (Lāra) とはサンスクリット Lāta の一般的な発音であるとされる。Cf. A. Cunningham, *The Ancient Geography of India, Vol. 1. The Buddhist Period, including the Campaigns of Alexander, and the Travels of Hwen-Thsang*, London, 1st ed., 1871; Low Price edition: New Delhi, 1990, p. 267。しかし、ラーダ (Lādha) 国であれば、マウリヤ朝以前からマウリヤ朝の時代に呼ばれていた名称で、現在のベンガル地方に相当する。現在の概念で言えば東インドであるが、本資料で言及する他の地域に比較すれば、南と言えなくもないであろう。Cf. Joseph E. Schwartzberg ed., *A Historical Atlas of South Asia*, Oxford University Press: Oxford, 1992, p.19。
- (9) 『統高僧伝』(434c) では「中賢豆の界鞞拏究撥闍城」とある。中賢豆はインドの中部で、界鞞拏究撥闍とは現在のカナウジ (Kanauj; Kannauj), あるいはカノージ (Kanoj) のこと。カナウジは北インド (ウッタラプラデーシュ州) 中部のガンジス河流域にあり、グプタ王朝時代 (320B.C.-A.D.ca480) の重要な都城であった。7世紀初頭には、北インドを統一したハルシャ・ヴァルダナ王の都であり、9世紀には Pratihara 王朝の都になった。Cf. A. Cunningham, *ibid.*, pp.316-322。
- (10) Takka の国はインダス川上流地域の Panjab 地方に相当する。紀元後550-700年頃にはこのように呼ばれていたのであろう。Cf. Joseph E. Schwartzberg ed., *ibid.*, p.26。
- (11) ここでいうカーピシーはカシミールではなく、ガンダーラとバーミヤー

- ンをつなぐ中継点、ナガラハーラの西である。詳しくは、桑山正進『カーピシー・ガンダーラ史研究』（京都大学人文科学研究所、1990、p.37, 61）を参照されたい。
- (12) 大興城は582年に隋の文帝（楊堅）が南北統一を契機に着手され、613年に煬帝が築城した隋の新都。漢の長安城東南約10kmの地に新たに築かれた。
- (13) 隋は「交趾の反乱」を鎮圧して、590年にハノイに都城を建設しているから、閩那囉多はこの時代のベトナムに配されたのであろう。なお、唐代には上海の南地域を越州と呼んでいたが、東越とはこの時代のことを意味するものではないだろう。
- (14) 『続高僧伝』（No. 2060, vol. 50, 435c）と『大唐内典録』（No. 2149, vol. 55, 274c）では七部三十二卷（『内典録』宋・元・明本では三十三卷）、『古今訳経圖紀』（大正 No. 2151, vol. 55, 366b）では十八部八十一卷、『開元釈教録』（No. 2154, vol. 55, 547b, 552b）では九部四十六経論とする。
- (15) 『貞観新定釈教目録』第十では武徳三年（620）とする。
- (16) 『大唐内典録』（278c27ff, 332b12ff）。
- (17) 実際は静泰撰『衆経目録』の中に引用される法経等撰の『衆経目録』（隋の開皇十四年、594年編）の中に見られるのであるが、前述のように、実際の法経撰『衆経目録』（大正 No. 2146）には記載されていない。つまり、それは静泰が当時流通していた経を彼の目録に記載したからである。静泰の目録によれば、笈多訳として27の経論が記載されているが、そのうち閩那囉多との共訳が17点であり、笈多訳単独の翻訳は10点である。
- (18) 菩提流支訳の末尾に、「思溪経本（南宋版）に於て流支の訳本を失い、真諦訳を誤って重出し、その一を留支訳、他を真諦訳としたが、今ここに、流支訳の『金剛般若経論』の中から経を録出してのせた」（大正757a）と注解され、流支訳を失って真諦三蔵の訳を代用し、それが留支訳として保存されていることがわかる。
- (19) 『高麗大蔵経』No. 13～No. 17までの五種。
- (20) 本書は『開宝大蔵経目録』から『縁山三大蔵総目録』までの、中国・朝鮮・日本の25種の大蔵経目録を比較対照している。同書、28頁の対照表を参照されたい。
- (21) 大正蔵では『昭和法宝総目録』第二卷（No. 22, 93b）で、『大蔵目録』（三卷）「高麗蔵」となっている。
- (22) これは「大正新修大蔵経目録」を含む数である。なお、本文中の目録番号は「大正蔵」『昭和法宝総目録』にて付せられた番号である。
- (23) この訳語は吉蔵『金剛般若経疏』（大正33, no.1699, 84a28）の序文に

『金剛般若経』を「金剛智慧彼岸到經」と呼ぶことにも見られる。

- (24) 「等」は「等しい」ではなく、複数語尾、ここでは-*ebhyaḥ* (Ab. pl.)の訳語とした。
- (25) *śrāvastī*「聞者」はコーサラ国の都で、室羅筏、舎婆提、舎衛などと翻訳される。ここではこれを *śrāv* < *√śru* (「聞く」と *stī* (従者), あるいは *ti* (= *iti* 者) との結合と解して「聞者」と訳したのであろう。この訳語は、2世紀に安息(パルティア)から洛陽に到った安玄が翻訳(「筆受」は嚴仏調)した『法鏡録』(大正12, No. 323)においても見られる。
- (26) *Jetavana* は「ジェータ王子の林園」という意味であるが、この *jeta* (< *jetr*) は「勝利者」であるから、これを「勝林」と訳したのである。「中」は Locative case の訳語。
- (27) 「搏施與」(*anāthapiṇḍada*) とはスダッタ(*Sudatta*)長者のことで、その布施行から付された名である。*anāthapiṇḍika* とも言われ、「給孤独」と訳される。*anātha* とは「身寄りが無い」という意味であり、これを「孤独」と訳すが、本経では「無親」と訳している。*piṇḍa-da* とは、*piṇḍa* と *da* の合成語で「食べ物に施す者」という意味である。本経では「丸めた食べ物、団子」という意味の *piṇḍa* を「搏」、*da* を「与える(者)」という意味の *da* を「施與」訳して、「搏施與」としたのである。
- (28) Cz ではこの後に *sambahulaīs ca bodhisattvair mahāsattvaiḥ* (多くの菩薩摩訶薩たちと) を付加する。漢訳では義浄訳のみが相当語句「及大菩薩衆」を付加する。
- (29) 「搏」は *piṇḍa*, 「爲」はその Dative case (-*āya*) である。
- (30) 「行已」*caritvā*, 絶対分詞 (Abs.) -*tvā* の「已」。
- (31) 「作已」*kṛta*, 過去分詞 (Past. pt.) -*ta* の「已」。
- (32) 「作已」*kṛtya*, 絶対分詞 (Abs.) -*tya* の「已」。
- (33) Cz では世尊 (*bhḡavān*) に対応する訳語はない。
- (34) 「邊」は Accusative case の訳語である。
- (35) 「所」は Genitive case の訳語である。
- (36) 笈多訳「若世尊彼合掌。向」は通常の漢文では「向世尊合掌(恭敬)」と訳しうる。
- (37) 笈多訳「乃至所有」に対応する訳語は玄奘訳「乃至」にも見られる。
- (38) Cz はこの後に *parama-āścaryam sugata* (最高に稀有なり。善逝よ) を付加するが、それに対応する訳語は義浄訳「希有善逝」を除いてすべての漢訳に見られない。P, Sc にもなし。
- (39) Cz はこの後に *āścaryam bhagavan* (稀有なり。善逝よ) を付加するが、

それに対応する漢訳はすべての漢訳に見られない。P, Scにもなし。

- (40) 「住應」(sthātavyaṃ)は「住」sthā-と「應」-tavaṃ(未來受動分詞fp.)に当たる。
- (41) Czはkula-putreṇa vā kula-duhitrā vā(良き家の子息,あるいは良き家の娘は)を添加する。
- (42) 他の漢訳は「善實, 如是如是」を繰り返さない。留支訳・真諦訳「如是。善男子」(evaṃ kulaputra)以外はすべて「如汝所説」(yathā vadasi)とする。この箇所ので evam etad yathā vadasi を Cz は evam etad subhūte evam etad とする。Sc も evam etad を繰り返さない。
- (43) 「説當」(bhāṣiṣye)の「當」は未來語幹(-iṣye)の訳語である。Cz は ahaṃ te を付加する。
- (44) Cz は ity を付加する。
- (45) Cz は sattvāḥ の後に sattva-dhātau を付加。
- (46) Cz は vā を付加。
- (47) Cz は prajñāpyamāṇaḥ を付加。
- (48) Cz は ca を付加。
- (49) Cz は mahāsattvasya (摩訶薩) を欠く。
- (50) Cz は mahāsattvasya (摩訶薩) を欠く。
- (51) Cz は iti (名) を欠く。
- (52) Cz は ātma-saṃjñā pravarteta を付加する。
- (53) 玄奘訳を除き, 他の漢訳は摩訶薩を欠く。Cz も mahāsattvena を欠く。
- (54) 玄奘訳を除き, 他の漢訳は摩訶薩を欠く。義浄訳と Cz は bodhisattvo mahāsattvaḥ を欠く。
- (55) 本文の「右後高」は割注に「南西北」とある。
- (56) Cz は uttara-āsvadha-とするが, uttarāsv adha-の誤植であろう。
- (57) 「上方。順不正方」は「上, 方 (diś), 順不正方 (vidiś)」と読んだ。なお, Cz は ūrdhvaṃ digvidikṣu であるが, Sc では ūrdhvaṃ vidikṣur avidikṣuḥ とある。
- (58) Cz は evaṃ eva (如是如是) を繰り返さない。
- (59) Cz は mahāsattvo を欠く。
- (60) Cz はこの部分を欠く。以下の他の漢訳もそれぞれ文脈が異なる。
- (61) Cz は na ではなく, no hīdaṃ とする。前後の文脈も異なる。
- (62) Cz は bhagavan を付加する。

※本稿は平成16年度科学研究費補助金(基礎研究C)による研究成果の一部である。